

避難する家族

世界の難民数は、1981年以降の10年間で2倍以上に増え、1981年の800万人から1992年の1,800万人以上になった。国境を越えて戦争や迫害から逃れる者の大半は家族単位で避難し、80%が女性と子どもである。

「難民になる意思決定は通常、家族決定です。家族パターン、特に拡大家族パターンが、誰が難民になりどこへ行くかを決定します」と、難民女性および子どものための女性委員会共同創立者スーザン・フォーブス・マーティン (Susan Forbes Martin) 氏は語る。

このように、完全な家族が緊急事態から避難することもあれば、高齢男性が女性と子どもを危険な状況から逃がす一方、自らは土地や財産を守るかまたは内戦に加わるために留まることもある。難民は一般に、親戚や親族が住んでいる場所への避難を求める。戦略は時とともに変化する。様々な家族成員は、危険度および生活の機会に応じて、故郷へ帰ることもあれば、避難中の親戚に合流することもある。

難民家族への当初の危険

避難過程とこうした行動を強いる状況は、多くの人々を死に追いやり、生存者に精神的外傷を与える。

マリア・アナ・デ・ヘイスス・ロドリゲス (Maria Ana de Jesus Rodriguez) 氏は、昨年公聴会で以下の証言を行った。軍隊による拷問と殺人に苦しめられた後、中米の出身村の家族らは1980年に避難したが、隣国へ渡る途中で一行のうち4人が命を落とし、翌年祖国へ戻る途中に同地域で空爆によりさらに36人が死亡した。

監督教会移住牧師教会会長で全アフリカ教会協議会の元事務局長であるキャノン・バージス・カー (Canon Burgess Carr) 氏は、ブルンジ人の母親たちから聞いた1970年代の話をも回想する。彼女らの家族は兵士に「燃える村から丈の高い草むらまで搜索され、そこでは一行が発見されるのを防ぐため、自分の赤ん坊の頭蓋骨を膝の間で潰して、泣き声を上げる幼子を永久に沈黙させなければなりませんでした」

自然の力も避難中の家族の多くの命を奪う。例えば、公海上の難破船を沈没させる嵐、干ばつ、洪水、および泥の地滑りである。ソマリアの国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) のために女性と子供に社会教育を行ったことがあり、現在はソマリア難民の救援計画を運

営しているフィルサン・ダーマン (Filsan Darman) 氏は、内戦からの避難中にわが子2人がライオンに殺されるのを見た母親と話をした。

時には、家族単位は完全に破壊される。例えば、スーダン南部の少年たちは、内戦の一方の側による攻撃または他方の側による徴兵を恐れている。彼らは長年にわたってケニアとエチオピアに集団避難してきたが、1988年までにエチオピアのイタングキャンプの居留民18万人のうち五分の四は連れのない男性であった。彼らの多くの父親は殺害され、姉妹と母親は強姦され誘拐された。

世界的なパターン

難民は全世界の一個所に集中しているわけではない。彼らは、インドシナ、中央アジア、アフリカの角、アフリカ南部、地中海東海岸、カリブ海、および中米などから大量に生じており、これらの地域では未開発、環境破壊、民族または宗教対立、厳しい抑圧、もしくは天災によって、激しい紛争がますます悪化している。1991年のわずか1週間で150万人がイラク、トルコおよびイランの国境地帯に殺到し、また、1993年のボスニア・ヘルツェゴビナおよび周辺地域の紛争は欧州内での集団移動を引き起こしている。

UNHCR は、第二次世界大戦直後の1951年に、難民に国際的保護を提供し難民問題への永続的解決策を追求するため設立された。第二次世界大戦は約1,700万人の難民を生じさせたと見積もられており、これは今日の難民数とほぼ同じである。しかしながら、難民の再定住は終戦直後よりも近年は難しくなっており、冷戦の終結による機会増大にもかかわらず、自発的な帰還は多数の複雑な問題を伴っている。

例えば、数十万人の難民がアフガニスタンに戻りつつあるが、500万人以上は異郷生活を続けており、多くの場合それは13年間に及ぶ。部族抗争、地雷、そして延々と広がる干上がった土地が、家族と出身村の間に立ちはだかっている。

国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) に難民として登録されている200万人以上のパレスチナ人については、待機期間はさらに長い。難民の第一波は1948年に生じ、同じ難民キャンプにこれらの家族の第四世代がしばしば見い出せる。

家族に対する影響

難民家族は、祖国、友人および親戚からの別離という精神的外傷に対処しなければならない。この影響はタイのサイト2キャンプのような場所で見られた。そこは1970年代と1980

年代に祖国から逃れた10万人以上のカンボジア人の居留地である。視察者は、見渡すかぎり広がる藁葺小屋の整然たる列に注目し、やがて深い無気力に気づく。特に、国連の後援による最近の帰還の前に、居留民は鬱状態、自殺、薬物乱用、アルコール中毒、犯罪、そして全くの退屈に陥っていた。かつてカンボジア難民救済活動に従事し、現在は国境なき医師団の人材募集を担当しているフランソワ・ルイジ (François Luigi) 氏は、「医学的問題はほとんどありませんでしたが、ひどい心理的問題がありました」と回想する。

多かれ少なかれ、家族は他者の慈善に依存しなければならない。世界中の難民の約半数は UNCHR と多くの非政府組織からの国際援助を受けており、その約半分はキャンプで生活している。国際援助を受けていない人々は通常、友人、親戚、地域社会または政府からの援助を必要とする。専門技能をもつ者でも仕事を見つけるのが難しいことがある。

女性が世帯主である難民家族の大半にとって、困難は倍加する。子の世話をしなければならない母親は、めったに職を見つけられない。女性は、レイプ、ハラスメント、強盗の被害を受けやすい。氏族のアイデンティティが男系により決定される社会では、女性が世帯主である家族は所属を失い、きわめて多くの救済援助は氏族を通じて提供されるので、援助から切り離されてしまう。

伝統的役割が奇妙に歪むにつれて、家族構造は変化する。妻は引きつづき炊事をし、薪を集め、育児をするが、事実上の世帯主である。夫は存在していても、扶養者の役割を果たすことができない。これは、家族の対立、家庭内暴力または遺棄につながることもある。「女性にはすることがたくさんあるが、男性は子どもを目にしながらかつて助けられずに絶望を覚え、逃げ去るのです」と、ソマリアの救援ワーカーであるフィルサン・ダーマン氏は語る。

UNCHR は、家族の調整を援助するプログラムを開発できるように、地域社会におけるこれらの社会経済的変化を難民労働者に認識させる研修プログラムを開発した。

子どもは大人よりも新たな状況に容易に順応し、外国語をより早く習得する傾向がある。子どもはしばしば家族と外界との間の情報パイプ役になり、その過程において親の特性の一部を担う。このような役割転換は、世代間紛争を招くことがある。

多くの難民状況において、子どもは残虐行為を目撃しており、自ら残虐行為をしている。難民女性および子どものための女性委員会を代表して、エチオピアの難民および国内避難民を視察したソマリアのティジタ・ベラチュー (Tuzita Belachew) 氏は、ほぼ継続的な戦争と飢餓の影響を見た。「私が話をした典型的な17歳の少年は、17年間にわたって残虐行

為を目撃してきました。彼らは生存者ですが、大半は人生の計画をもっていません。年長者に対する子どもの伝統的尊敬は壊れています。ほとんどの子どもが銃をもって学校へ行くのです」。

難民家族の力

家族が難民になるとき遭遇する困難にもかかわらず、家族は依然としてかけがえのない力の源泉である。親戚は育児を手伝い、他の家族成員の欠如により生じた間隙を埋める。家族生活の共有する目的は、追い立てられた存在における固定点となる。

拡大家族関係は特に重要である。例えばアフリカでは、植民地が人為的に引いた国境を越える難民は、しばしば自分の部族または氏族の地域社会に到着する。「彼らのほとんどは同じ言語を話し、かつて同じ市場に通っていました。そういうわけで、彼らはアフリカ流に親戚として歓迎され、政府が援助し、長老が援助し、地域社会が援助します」と、難民救援を積極的に行っている、ガーナの村出身の女王的存在ナナ・アピードゥ (Nana Apeadu) 氏は語る。

難民は、崩壊家族の修復における大きな回復力と同情を示してきた。多くの状況で、難民孤児は難民家族に養子として受け入れられ、新しい家族単位が形成される。ナナ・アピードゥ氏は、殺害された親戚の叔父、いとこ、子を含む9人を世話しているリベリア出身の28歳の難民女性を知っている。

祖国へ戻る意思決定をするとき、拡大家族との連絡がきわめて重要である。女性委員会のスーザン・フォーブス・マーティン氏が「家族との通信ネットワーク」と呼ぶものは、国境の向こう側の安全性に関する最も頼りになる情報源である。

アフリカおよび西アジアの難民家族

難民の窮状に対する国際的関心の大半は、サハラ以南アフリカおよび西アジア地域に向けられている。以下は、厳しい大変動を経験した国々を去る家族の状況の要約である。

モザンビークの地方での残酷な闘争は、反乱軍が南アフリカ政府の支援を得ていることが知られるが、村々に壊滅的打撃を加え、さらに女性を強姦し虐待した。1980年代を通じて、部族的に関係のあるマラウイの親族は、マラウイ自体貧困国だが、モザンビーク難民のニーズに寛容に対応した。難民数——現在100万人と推定——が管理不可能な割合に達するまで、農地や地域社会の援助が速やかに提供された。最近交渉されている休戦協定と国

連平和維持計画は、難民に帰還への希望をもたらしている。

リベリアで1989年末に始まった内戦は、残酷な部族抗争に火をつけた。リベリアの人口250万人のほぼ半分は戦争で避難民となったと見積もられており、難民および国内避難民が世界で最も高い割合を占める国になっている。救援機関と隣国は、国境を越えて避難した家族の援助に力を入れてきた。例えば、国連婦人開発基金（UNIFEM）とユニセフ（国連児童基金）は、世帯主である難民女性が収入を得ることができ、他の難民が集まって交流できる雑貨店を援助している。コートジボワール南部では、UNCHRは種子と農具を提供し、政府は家族が国境内に再定住することを許可している。

内戦、部族抗争、宗教対立、干ばつおよび飢餓が、過去10年間にエチアピア、スーダン、ソアリアを襲った。戦争と迫害の盛衰に従って、難民は大量にこれらの3カ国間で移動し、近隣のケニアにも流入した。スーダン難民は連れのいない若年男性の割合が著しく高く、ソマリアとエチオピアから避難する家族は大規模な混乱に見舞われてきた。多数の男性が、武力抗争に加わるか、職を求めて他国、特にペルシャ湾岸諸国に移住するなかで、死亡するか、または家族と切り離されてきた。UNHCRは最近、女性へのカウンセリングと、家族喪失の影響に対処するためのスタッフ研修をより重視している。残念ながら、ソマリアでの混乱を激化させている氏族抗争が難民キャンプにも広がり、食糧配給をさらに複雑にしている。

パレスチナ人にとって、アラブ文化全般がそうであるように、家族は生活の中心にある。多くの男性が死亡、投獄または求職で不在であるにもかかわらず、家族は依然として砦である。重要なことに、難民は家族単位でUNRWAに登録されている。ガザ、ヨルダン川西岸地区、ヨルダンおよびレバノンにあるキャンプでは、拡大家族用の共同住宅をつくるために住宅が増築されている。UNRWAは、女性協同組合、学校、保育施設および家族診療所を含め、家族を支える広範なサービスを提供している。

1991年にイラクから避難し、それ以降大きな困難と危険に直面して帰還したクルド族にとって、あらゆる意味で、家族構造は生存のために必要不可欠なものであった。拡大親族の絆は、相当数のクルド族が居住しているイラン西部に渡った人々にとって最も役立ったことが証明されている。この地域のキャンプは閉鎖され、イラクへ帰還しなかった難民は現地文化と経済に同化した。

救援援助と開発

食糧、衣類、住居、医療という基本的な生存ニーズを超える難民家族への援助は、難民が自立し生産力を有するようになる良いチャンスを与える。このような援助は事実、一種の開発援助である。それゆえ、開発と救援援助を結びつける大きなニーズがある。

これを行う一つの方法は、緊急事態の初期に使用された基盤を開発活動に結びつけること、例えば農業用種子の提供である。できるかぎり早急に、小規模事業や協同組合への融資、家族診療所、学校および保育施設の設置といったその他の種類の援助が提供されなければならない。難民と、同じく窮乏している現地人との反目を抑えるため、これら二つの集団で開発援助を共有することが有益な場合もある。

この過程は容易ではない。多くの国の政府は、難民が国境内に無期限に留まることを含む開発計画を奨励するのを躊躇している。多くの開発機関は、女性が率いる世帯に協力することに慣れていないか、拡大家族構造の重要性を考慮しない。

援助は、ある状況において難民に依存心を植えつけてしまうことがある。祖国または新居住地の開発援助の信頼性に不信を抱く家族は、難民として留まり、少なくとも緊急事態援助の受給資格を保つことを選択する場合もある。また、極度に開発が遅れている諸国の政府には、経済的理由により難民が外国に留まることを希望する場合がある。援助で受け取るか、または労働で稼いだ金額の一部を、残っている親戚へ送ることによって、難民は一時的に祖国の国際収支を改善し、国の福祉負担を軽減する。

最も緊急な課題として、国際社会は国内避難民を生む紛争の解決を支援するよう要請されている。リベリアから避難した女性がナナ・アピードゥ氏に送った手紙には、「最終的に誰も“難民”という言葉の意味を知らなくて済むように、毎日私は平和を祈っています」と記されている。